

「生老病死と介護を語る」

革新の40年を紹介

介護食の開発、在宅介護サービスの展開、特別養護老人ホームでのみとりなど、高齢者介護の分野で約40年にわたり数々の先進的な取り組みを行い、日本の介護の発展に大きな貢献をしてきた社会福祉法人「小田原福祉会」（小田原市）の時田純会長（91）が著書「生老病死と介護を語る 他者への献身が豊かな人格を創る」を出版した。仏教へのあつい信仰と介護に関する科学的な探究心を両輪にした独自の姿勢や、法人設立当初から地域に目を向け、現在の地域包括ケアシステムを先取りしてきた歴史などが語られ、貴重な内容となっている。

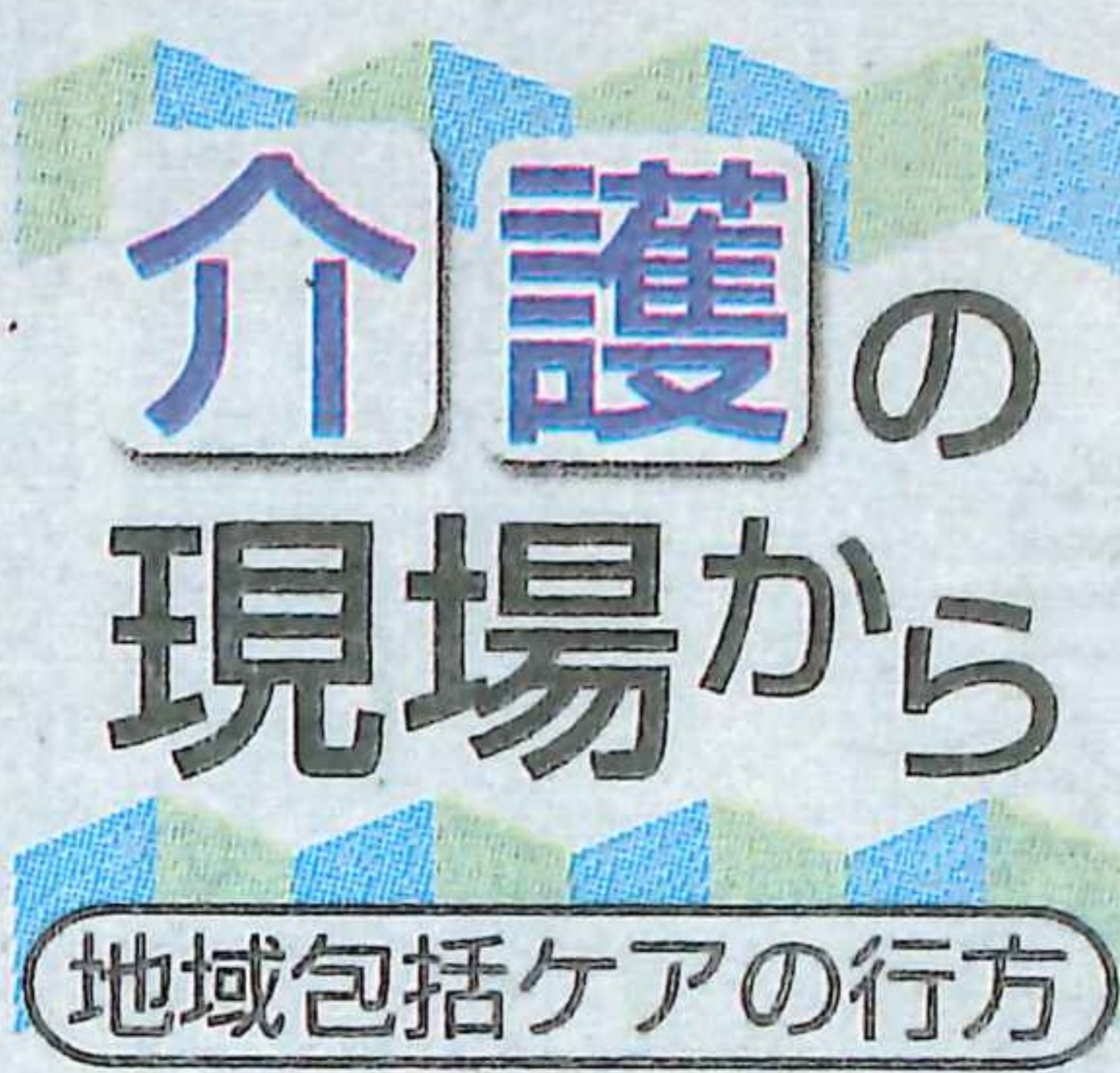
（熊谷 和夫）

小田原福祉会は昨年、設立40周年を迎えた。そして時田さんはことし7月、小田原福祉会の理事長を退任し、会長に就任した。著書は、この節目にあたり、90歳を超えて現役で働き続けている時田さんの人生と、小田原福祉会の歴史を振り返る内容となっている。

著書で時田さんが何より強調したのは、「人間の尊厳」「生命

の尊厳」だ。生死の境をさまよいつつ、地獄の苦しさを味わったという満州（現在の中国東北部）での戦争体験。そこで骨身に刻み込まれたのが「生命と平和の尊厳」だった。その後、仏教を通して「生老病死」への学びを深め、1978年に特別養護老人ホーム「潤生園」を開設した際には、「人は人として存在するだけで尊い」という言葉を運営理念に掲げた。

「人を援助する介護の仕事は、人は誰もが等しく平等で、唯一無二の存在である」という基本的認識が不可欠。「生命の価値を認識していなくては、高齢者を心から敬愛することなどできない」「介護という行為は、



思想と技術高め

尊い『仏の生命』を内在する人々を、豊かな知識と経験を積み重ねて、真心から援助する行為」と語る。そして、「博愛の行動こそ人間として生きる、最高の道」「介護は人格を磨き、人格を培う聖業」と訴えた。

著書では、時田さんの確固とした思想、信念を、職員も理解して「潤生園の介護」が実現している経緯を熱く語っている。そして、印象深いのが、両輪

のもう一つ、介護の科学化への努力だ。その代表例が、84年の日本初の介護食開発。飲み込み

者にも口から食べてもらいたいと、国会図書館で国内外の論文を調べ、研究者を探し、ついに管理栄養士らと介護食の共同開発に至った経緯を詳しく紹介している。

96年からは電子手帳を使った介護記録システムを導入し、24時間の介護の全記録を残し、文書化、グラフ化している。体重の減少と死亡との関連性についての調査分析なども行っている。これらは、「尊厳を支えるみとり」の基盤になった。潤生園の特養では、ほとんどの利用者が病院に行くことなくホームで安らかな最期を迎え、「これまでのみとりは約600人になる」という。そして、歴史的にも興味深い

のが、地域包括ケアシステムの先取りだ。いずれも自主事業で、79年から寝たきり老人デイサービス、寝たきり老人短期入所、ツリーデイサービス（1泊2日）、89年からは配食サービス、96年には24時間・365日型訪問介護、97年には訪問看護もスタートさせた。地域に目を向け、「困っている人を見逃さない」と、多様な在宅サービスの創造に取り組んだ経緯が語られている。これらのサービスは後に介護保険制度へ取り込まれていく。

ただ、時田さんは、日本の介護の今後に非常に厳しい認識を持っている。「日本はセーフティネットがほとんど整備されていない。老後が非常に不安になっている」。そして、地域包括ケアシステムも「今の状況ではできない」と指摘する。

会長職になったことで、より自由な立場で、社会保障と介護の改革に取り組みたいという。90歳を超えたが、「果たすべき使命は終わっていない」「生命ある限り学び続け、学びを活かして変革に挑みたい」。強い決意だ。

著書は、A5判で318ページ。日本医療企画から2160円（税込み）。



著書「生老病死と介護を語る」と時田純さん

◆時田 純（ときた・じゅん） 1927年、東京生まれ。49年、小田原市役所入庁。63～75年、小田原市議会議員3期。77～2018年、社会福祉法人「小田原福祉会」理事長。18年、「小田原福祉会」会長。県老人ホーム協会会長など多数の役職を歴任。